ストラウドの不満足

Stroud's Dissatisfaction

土屋陽介

TSUCHIYA Yohsuke

要旨 本稿は、現代アメリカの哲学者バリー・ストラウドの超越論的論証をめぐる一連の考察を手がかりにして、哲学において超越論的論証と呼ばれている論証形態の射程と限界を見定めることを目的とした論文である。特に本稿では、ストラウドが *The Quest for Reality* において展開した、超越論的論証と形而上学の関係に関する見解が主題的に扱われる。第1章では、超越論的論証と「色の形而上学」に関するストラウドの議論を概観し、彼がそこで強調する「形而上学的不満足」とは正確にどのような問題であるのかを描き出す。第2章では、「形而上学的不満足」という捉え方に反対するブロークス反論を検討し、ブロークス反論が一方では正鵠を得たものであるものの、他方ではストラウドの立場を単に誤解したものすぎないことを明らかにする。第3章では、超越論的論証と形而上学の関係をめぐる、ストラウドが「形而上学的不満足」を強調する背景には、形而上学の本性に関する彼独自の哲学的洞察が隠れていることを明らかにし、その上で、形而上学に関するストラウドの見解の積極的な評価を試みる。結語では、本稿で考察したようなストラウドの形而上学に関する見解が、*The Significance of Philosophical Scepticism* などで見られる彼の懐疑論に関する見解と密接に関係していることを示唆する。

序

哲学において超越論的論証 (transcendental argument) と呼ばれる議論は、いったいいかなることを証明するための議論なのだろうか。——カントにまでさかのぼると言われるこの論証形態の射程と限界を見定めようとする試みは、ストラウドが長年にわたってねばり強く考察を重ねてきた哲学的問題の一つである。これについては、ストラウドは最近の著作 *The Quest for Reality* において、形而上学的な「実在の探求」の本性をめぐるもう一つの別の考察と組み合わせることによって、彼の公式見解とも言える一定の見解を表明している。本稿では、*The Quest for Reality* で表明されている上記の問題についてのストラウドの見解を精査し、それに対して一定の疑問と批判のまなざしを向けつつも、最終的には彼の見解を擁護する可能性を探りたい。

The Quest for Reality のストラウドは、色の客観性・実在性という伝統的な形而上学の問題を巡って、長大かつ細部にわたってたいへん込み入った議論を展開している。その議論は、ストラウド自身にとっては、形而上学的な「実在の探求」の一事例研究という位置づけにすぎないのだが、それはそれ自体で自律独立した議論を形成しており、論ずるに値する興味深い論点や様々な問題を含んでいるように思われる。しかし、その議論に直接コミットすることは、本稿の趣旨から大きくはずれるため、残念ながら本稿では割愛せざるをえない。本稿では、さしあたって、色の哲学に関するストラウドの議論それ自体の妥当性

は一切問題にせず、そこからの帰結とストラウドが考えているものに考察の焦点を絞ることによって、問題の拡散を防ぎたいと考える。

1 ストラウドの不満足

本章では、哲学で一般に「超越論的論証」と呼ばれている論証形態の射程と限界に関して、*The Quest for Reality* のストラウドは具体的にどのような見解を表明しているのかを明らかにする。しかし、そのためには、ストラウド自身は実際にどのように議論を組み立てることによって超越論的な議論を構成しようとしているのか、ということに触れないわけにはいかないであろう。すでに述べたように、本稿では、彼の構成する超越論的な議論の中身それ自体に立ち入って検討を加えることはしないが、少なくとも、彼の構成する議論の枠組みだけは示しておく必要がある。ストラウドは、われわれが色を知覚する際のある一般的事実に注目することから、色に関するわれわれの日常的信念をある仕方で擁護する超越論的な議論を開始している。

われわれの色の知覚に関して、ストラウドがまずはじめに注目するのは次の事実である。われわれは、色を知覚する典型的な場面においては、単に色だけを知覚する（たとえば、「黄色を見る」というような具合に知覚する）のではなくて、何かがなんらかの色をしているのを知覚する（たとえば、「黄色い物体を見る」というような具合に知覚する）¹。われわれは、レモンの色を知覚する際に、「レモン」と「黄色」を単に同時に知覚しているのではなくて、まさにそれを「黄色いレモン」として統合的に知覚しているのである。そして、ストラウドの結論だけ取り上げると、こうした知覚がわれわれにとって理解可能であるためには、少なくとも、「このレモンは黄色い」というような命題的思考をわれわれは理解することができなければならない、ということになる²。

すると、こうした統合的な色知覚（「色のついた物」という知覚）は、非命題的な「感覚」と同一視することはできないので、そうである以上、われわれが日常的に行っているこうした知覚の帰属（および、こうした知覚を含む様々な命題的態度の帰属）もまた、それが可能であるためには、何かしらの条件を満たしていなければならない、ということになる。そして、再びストラウドの結論だけ取り上げると、こうした帰属が可能であるためには、帰属者自身が「色のついた物」という観念を保有し使用することが必要とされるのである³。つまり、われわれがある人に、「黄色いレモン」の知覚を帰属することができるためには（言い換えれば、「あの人は黄色いレモンを見ている」とわれわれが言うことができるためには）、その人の見ているものが「黄色いレモン」（という「色のついた物」）であることをわれわれ自身が信じていなければならない、ということになる。他人や自分が、色のついた物を知覚し、色のついた物についての信念をもっていることを認める以上、そうした知覚や信念を帰属する自分自身もまた、物に色がついているということ（すなわち、色のついた

¹ この見解が妥当であるかどうかについては、ストラウドは *The Quest for Reality* のうちの一章を割いて詳細に論じている。Cf. Stroud (1999b), Ch. 5.

² Cf. Stroud (1999b), Ch. 5-7.

³ この結論に至る議論こそが色の知覚をめぐるストラウドの議論の中核を成すものであるが、繰り返し述べているように、本稿ではその詳細については割愛せざるをえない。Cf. Stroud (1999b), Ch. 7.

物が存在するということを) 信じていなければならないのである。

以上が、われわれの色の知覚に関して、ストラウドが実際に展開している議論のきわめて大まかなあらすじである。そして、ストラウドのここまでの議論は、明らかに、「色のついた物」に関する知覚や信念の帰属可能性条件を解明するものであり、それゆえ、この議論は、少なくともその意味において、超越論的論証と呼ばれる論証形態に分類されるであろう。繰り返しになるが、ここまでの議論は、色の哲学に関するストラウドの結論を繋げて示しているだけであり、いちばん肝心な議論の中身そのものには一切踏み込んでいない。しかし、本稿にとってそれは問題ではない。私が本章でさしあたって明らかにしたいのは、こうした超越論的な議論を組み立てることによって、色の形而上学的な身分という伝統的問題にストラウドはどのようなアプローチを試みているのか、ということだけなのである。

さて、形而上学的な色の非実在論者は、伝統的に次のような説明様式にコミットすることがしばしばであった。彼らは典型的には次のように述べる。「色は物それ自体に属する性質ではなくて、われわれの感覚の性質にすぎない。したがって、色のついた物についてわれわれは様々なことを信じているが、そうした信念は実はすべて誤りである。色のついた物というのは、われわれから独立した世界においては本当は存在しない。」⁴しかし、ここまでのストラウドの超越論的な議論がもし正しいのであれば、こうした説明様式はそもそも整合的な仕方では受け入れ可能な説明様式ではありえない、ということになるであろう。というのも、こうした説明様式を受け入れるということは、(1) 色のついた物についてわれわれは様々なことを信じている、ということと、(2) そうしたわれわれの信念は実はすべて誤っている (つまり、「色のついた物というのは、われわれから独立した世界においては本当は存在しない」)、ということと、両方とも受け入れることにほかならないが、ここまでの議論が示していることによれば、(1) を受け入れる人は誰であれ (すなわち、色のついた物についての様々な信念を他人や自分に帰属する人は誰であれ)、自分自身もまた色のついた物が存在するということを信じていなければならないので、もはやその人は、自己撞着を免れる仕方では、(2) を同時に受け入れることはできないからである。ストラウドは、色の非実在論者が伝統的にコミットしてきた以上のような説明様式のことを、色のついた物についてのわれわれの信念が全面的に誤っていることを「暴露しようとするもの (unmask)」という意味で、「アンマスキングな形而上学的説明」と呼んでいるが、要するに、ここまでの超越論的論証からは、「こうしたアンマスキングな形而上学的結論に整合的な仕方では到達することは、われわれにとって不可能である」ということが最終的に帰結する、ということになるのである⁵。

すると、これはたいへん強い帰結であるように思われる。通常われわれは、色のついた物について様々な信念を抱いていると考えているが、以上の議論によれば、われわれはひ

⁴ ただし、すべての色の非実在論がこうした説明様式にコミットしているわけではないし、そのことはストラウド自身もまた十分に自覚していることである。たとえば、色のある種の傾向性によって説明する理論は、「色のついた物についてのわれわれの信念は全面的に誤っている」と主張する必要はない。Cf. Stroud (1999b), Ch. 6. また、民間心理学の語り方を完全に拒否するようなきわめて強い物理主義を採用するならば、「色のついた物についてわれわれは様々なことを信じている」ということも拒否されるであろう。Cf. Stroud (1999b), p. 207. ただし、色のある種の傾向性によって説明する理論は、重大な困難を抱えていて結局のところ成功しない、とストラウド自身は考えている。Cf. Stroud (1999b), Ch. 6.

⁵ Stroud (1999b), p. 168.

とたびこのことを認める以上、そうした信念が全面的に誤っているとする立場（つまり、われわれから独立した世界では色のついた物は存在しないとする立場）を整合的な仕方では受け入れることはできなくなってしまうのである。そこで、われわれは以上の結論を得たことから、きわめて自然に、「結局のところ本当に物には色がついている」という形而上学的結論（すなわち、形而上学的な色の実在論）が証明されたと考えたくなるかもしれない⁶。ところが、ストラウド自身は、こうした自然な直観に反して、それを「吟味し抵抗するに値する誘惑」と呼び、次のように述べる⁷。

色のついた物についての信念を帰属しようとしている以上、アンマスキングな説明の述べている見解が真である判明するということとはありえない。しかし、このことは、そうした見解が矛盾しているとか、真ではありえない、ということを含意しているわけではない。[ここまでの超越論的な議論によって、] アンマスキングな説明が失敗しているということには保証が与えられているのだが、そのことは、色のついた物についての信念をもっている場合には色のついた物が世界に存在している、ということを含意しているわけではない。⁸

なぜそうなるのであろうか。ストラウドはその理由を次のように答えている。「色のついた物についての信念帰属に関して、私がこれまで結論してきたことは次のように表現することができる。すなわち、私は、そうした信念はその本性上（大部分は）真である、と述べていたのではなくて、そうした信念帰属はその本性上（大部分は）真理帰属である、と述べていたのである」⁹。つまり、ストラウドがここまでの超越論的な論証を通して、色のついた物についての信念の帰属可能性条件として証明しているのは、「物に色がついている」ということが真でなければならない、ということではなくて、「物に色がついている」ということを帰属者自身は真であるとみなさなければならない、ということだけなのである。すると、「アンマスキングな形而上学的説明」は、それ自体としては、何らかの矛盾や不整合が含まれていると（ストラウドの議論によって）証明されたわけではない、ということになる。「色のついた物についてわれわれは様々なことを信じているにもかかわらず、そうした信念は実はすべて誤っている」という可能性は現にありえない、ということまでは、ここまでのストラウドの議論は論証しているわけではないのである。もう一度整理すると、ストラウドの議論によって論証されているのは、正確に言うと、色に関する「アンマスキングな形而上学的可能性」が真であることをわれわれは整合的な仕方では受け入れることはできない（なぜなら、色のついた物についての信念を帰属するためには、帰属者自身もそうした信念を真であるとみなさなければならないから）、ということ以上でも以下でもない。そして、これはあくまでも「われわれにとっての事実」の証明にすぎないので、このことから、われわれから独立した「世界についての事実」（すなわち、色の客観性に関する形而

⁶ Stroud (1999b), p. 192.

⁷ Stroud (1999b), p. 192.

⁸ Stroud (1999b), p. 201.

⁹ Stroud (1999b), p. 202.

上学的事実) を結論として導くことはできないのである¹⁰。

こうして、ストラウドは以上の考察を経て、ここまで展開してきたみずからの超越論的論証は、色の客観性・実在性に関する伝統的な形而上学的問題に答えを与えない、という診断を下す。

このことは、ある程度正しいとしても、たぶんあまりにも否定的すぎる帰結であるように思われるであろう。われわれには、ある種の不安ないし不満足が残されるのかもしれない。物に色がついているということが事実であるとは立証されていない。そして、われわれみな物には色がついていると信じている場合でさえ、物に色がついていない可能性は開かれたまま残されているように思われるのである。¹¹

ストラウドのこうした見解を、本稿では「ストラウドの不満足」と呼ぶことにする。

2 いったいストラウドは何が不満なのか？

以上のストラウドの診断は、しかしながら、彼自身も認めているようにあまりにも否定的すぎて、彼がそこでいったい何に躊躇しているのか理解に苦しむかもしれない。あるいは、「アンマスキングな形而上学的説明」を整合的な仕方では受容することの不可能性が論証されてもなお、「われわれから独立した世界において色のついた物は存在しない」という可能性を否定することができないと考えることは、何かしらのまやかしが含まれているように思われるかもしれない。実際、*The Quest for Reality* の多くの読者は、ストラウドのこのような「不満足」の表明を前にして、とまどいと困惑を率直に表明している¹²。そして、ストラウドのこうした立場に対して、典型的な疑問と批判を提出しているのが、ブロークスである。

ブロークスは、ストラウドが述べている不満足について、おおよそ以下のようなコメン

¹⁰ 以上は、超越論的論証と懐疑論の関係を主題としたストラウドの一連の論文でも繰り返されてきた論点である。Cf. Stroud (1968), Stroud (1977), Stroud (1984a), Stroud (1994), Stroud (1999a), Stroud (1999c). また、そちらでも何度も指摘されているように、以上の事情はムーア文で表現されているパラドキシカルな状況と類比的である。簡単に説明しよう。ストラウドによれば、ムーア文（「私は雨が降っていると信じている。そして、雨は降っていない」という文）は、「誰であれ整合的な仕方では真であると信じたり主張したりすることができないような何かを表現している」とはいえ、そのことは、「その文が述べていることが決して真ではありえない」ということに起因しているわけではない。実際、「雨が降っていないときに、雨が降っていると私が信じているということは、真でありうる」。よって、ムーア文の主張不可能性は、ムーア文が実際に誤りであるということを含意していない。では、ムーア文の主張不可能性は、いったい何に起因しているのか。ストラウドによれば、それは、「誰であれ整合的な仕方では、ムーア文の連言肢の両方を真であると信じたり主張したりすることはできない」という事実に起因しているのである。すなわち、もし私が、(1)「私は雨が降っていると信じている」と述べるならば、私はもはや整合的な仕方では、(2)「雨は降っていない」と主張することはできない。また、もし私が、(2)「雨は降っていない」と信じているならば、私はもはや整合的な仕方では、(1)「私は雨が降っていると信じている」と述べることはできない。「この「パラドクス」が例証しているのは、ある事柄は、それ自体として不可能であったり不整合であったりするわけではないにもかかわらず、誰であれ整合的な仕方では、その事柄を信じたり主張したりすることができないことがありうる、ということなのである」。Cf. Stroud (1999b), p. 204.

¹¹ Stroud (1999b), p. 204.

¹² Cf. Byrne (2002), Brewer (2004), Broackes (2004), Fogelin (2004).

トを寄せている¹³。ストラウドは、「色のついた物が存在する」というわれわれの日常的信念を擁護する論証をせっかく作り上げておきながら、最後の最後の段階で「形而上学的な不満足」なるものを強調することによって、すべてを台無しにしてしまった。なぜなら、「アンマスキングな形而上学的可能性」が最終的に取り除かれないのだとしたら、色のついた物が存在するというわれわれの日常的信念は、結局のところ、正当化されえないことになるからである。しかしながら、「アンマスキングな形而上学的説明」を整合的な仕方では受容することの不可能性が論証されてもおお、色のついた物が世界に存在するという結論（形而上学的な色の実在論）を導くことはできない、という考え方のうちには、形而上学の課題と目的についてのある歪んだ考え方——形而上学を、われわれの理解を完全に超越した「外的」事実についての「事実問題（question of fact）」とみなす考え方——があらゆる含まれているのではないだろうか¹⁴。すると、形而上学の扱う問題は「事実問題ではなくて、哲学的な理解の問題（question of philosophical understanding）である」ということさえ正しく認識すれば、ストラウドが表明する不満足と称するようなものは、「治療」されて雲散霧消してしまうのではないだろうか¹⁵。

以上のブロー克斯の指摘は、「ストラウドの不満足」を前にした際に誰もが思う疑念を代弁するものであろう。しかし、少なくとも彼のコメントの前半部分は、ストラウドに対する誤解が含まれており、ストラウド自身も、ブロー克斯への応答のなかでそのことを指摘している¹⁶。ストラウド自身の考えによれば、彼の述べる形而上学的な不満足とは、「色のついた物に関する信念に対して、いかなる脅威を表現するものでもないのである」¹⁷。

私は、形而上学の問題に対して答えを与えることについての疑いや留保を表明することで、色のついた物が世界に存在することを疑うつもりはないし、多くの人々がそうしたことを信じていることを疑うつもりもない。¹⁸

しかし、なぜそうなるのであろうか。この点について、ストラウド自身はあまりはっきりとしたことは述べておらず、そのことが結果として、ブロー克斯のような誤解を招き寄せる要因になっていると私には思われる。とはいえ、このことをきちんと明らかにしておくことは、ストラウドにとってもきわめて重要である。なぜなら、ここでブロー克斯が陥っている誤解とは、ストラウド自身が‘Transcendental Arguments’以降久しく堅持していた考え方とまったく同じだからである¹⁹。

そこで、色に関する「アンマスキングな形而上学的可能性」が最終的に取り除かれないことを認めたとしても、それによっては「色のついた物が世界に存在する」というわれわれ

¹³ Cf. Broackes (2004).

¹⁴ Broackes (2004), p. 421.

¹⁵ Broackes (2004), p. 421.

¹⁶ Cf. Stroud (2004).

¹⁷ Stroud (2004), p. 442.

¹⁸ Stroud (1999b), pp. 200-1.

¹⁹ ‘Transcendental Arguments’において、ストラウドは次のように述べていた。「X という概念が客観的に妥当であることを論証するということは、X が実際に存在することを論証することにはかならない」。Stroud (1968), p. 25. 私の知る限りでは、ストラウドは‘Kantian Argument, Conceptual Capacities, and Invulnerability’以降、この立場を放棄している。Cf. Stroud (1994), Stroud (1999a), Stroud (1999c). 以上のストラウドの見解の変化をまとめたものとしては、土屋 (2003) を参照。

れの日常的な信念は脅かされない、ということ、私自身の議論を補うことによって、ここではっきりと示しておくことにしたい。以下に示す私の議論の構造はきわめて単純であり、前章で示したストラウドの議論が含意していることを明示的に述べ直しているだけである。

ストラウドの議論によれば、色に関する「アンマスキングな形而上学的説明」が退けられるのは、それが前提していること（すなわち、色のついた物についてわれわれは様々なことを信じているということ）を受け入れつつ、その結論（すなわち、色のついた物は存在しないということ）を受け入れることが、（結論を受け容れることと、前提を受け容れることが可能であるための条件とが背反するため）不整合を含むことを受け入れることであるがゆえに不可能であるからであった。つまり、ストラウドの超越論的論証が完全に正しいとすれば、私が目の前にあるレモンを見て、それが黄色いと信じつつ（つまり、「そこに黄色のレモンがある」という信念を抱きつつ）「このレモンは本当は色がついていない」と信じるということは、何かしら整合性を欠いた（論理的に矛盾する）信念群を保有することにほかならないのである。すると、このとき、「アンマスキングな形而上学的説明」が正しい説明であるとわれわれに判明するということは、最も強い意味においてわれわれの理解を超え出ている、ということになる。つまり、われわれは、色のついた物についてわれわれは様々なことを信じているということを経験する以上、矛盾を含んだ文集合を理解することはできないという意味において、「われわれから独立した世界では色のついた物は存在しない」という可能性が真であるということを経験することはできないのである。

以上の議論が示しているのは次のことである。ストラウドの超越論的論証が完全に正しいと仮定するならば、色に関する「アンマスキングな形而上学的可能性」とは、要するに、そうであると判明することが（矛盾を含んだ文集合を理解することはできないという意味において）われわれの理解を完全に超え出ているような可能性にほかならない。したがって、たとえそうした可能性が（ストラウドの述べているように）証明されずに残されているのだとしても、そのことは、「色のついた物が世界に存在する」というわれわれの日常的な信念をいかなる意味においても脅かすものにはなりえない。ストラウド自身は、このことを次のように表現している。「アンマスキングな形而上学的説明によって、色のついた物に関するわれわれの信念が傷つくことは決してない。」²⁰

3 不満足を訴えることの哲学的意義

しかし、そうすると、超越論的論証はこうした極端に空虚な可能性をなおも取り除くことはできないとし、あまつさえ、そのことはなんらかの哲学的な「不満足」を残すものであるとするストラウドの考え方のうちには、やはり、形而上学の課題と目的についての何かしらの歪んだ捉え方が根を張っているのではないだろうか。これはまさに、先に言及したブロークスのコメントの後半部分に相当する疑念であるが、「アンマスキングな形而上学的可能性」の内実のなさが明示化されたいまとなつては、こうした批判はまことに正鵠を

²⁰ Stroud (1999b), p. 206.

得ているように改めて思われるかもしれない。少なくとも確実に明らかなのは、ここで言われている形而上学的可能性とは、もはや完全に遊び車の働きを果たすものでしかない、ということである。というのも、「アンマスキングな形而上学的可能性」とは、そうであると判明することがわれわれの理解を完全に超え出た可能性であるため、それはもはや、われわれの日常的信念を阻却することもなければ支持することもないからである。

すると、こうしたまったくの遊び車にすぎない可能性をなおも真性の形而上学的可能性とみなし、それに白黒つけることを真性の形而上学的課題とみなすことは、形而上学を「事実問題」と取り違えることに由来するまったくばかげた誤解なのではないか。そして、形而上学を「哲学的な理解の問題」として「正しく」把握し直すならば、「アンマスキングな形而上学的可能性」の内実がこれほどまでに空虚であることの証明に（超越論的論証を組み立てることによって）成功したと考える以上、そのことから、「色のついた物は世界に本当に存在する」という形而上学的な色の実在論を結論すべきではないか（あるいは、そう結論するのが「健全な」形而上学ではないか）。たとえば、ブロークスのような人であればこのように考えるであろうし、いずれにしても、こうした考え方は一定の説得力をもつであろう。では、ストラウドはこのような考え方に対して、いったいどのように応じているのだろうか。

実を言うと、ストラウド自身は、みずからの見解に対してこうした反論が寄せられるであろうことを十分に予期していながら、それに対して応答を行うことを明白に拒否している²¹。ストラウドは、ブロークスのコメントに対しても、「含意の不成立」という表現をただ繰り返すことで、みずからの立場を述べ直すのみである²²。これは、われわれがすでに本稿の第1章で見てきた考え方と同じ考え方である。すなわち、「アンマスキングな形而上学的可能性」が真であることをわれわれは整合的な仕方で受け入れることはできない、ということがたとえ証明されたとしても、そのことは、そうした可能性が実際にありえないということまでは含意していない、という考え方である²³。しかし、こうした説明を単に繰り返すだけでは、先のブロークスの疑念に対して何ら有効な回答になっていないことは明らかであるだろう。

では、ストラウドはこうした反論に対して、答えるべき言葉を一つももたないのだろうか。あるいは、「ストラウドの不満足」とは、彼の「歪んだ」形而上学観の見せる偽りの問題にすぎないのだろうか。しかし、必ずしもそのように考える必要はないと私は考えている。というのも、ストラウドは決して明示的には述べていないものの、彼が「不満足」を訴える背景には、形而上学の本性に関する彼独自の哲学的洞察があるように私には思われるからである。

このことについて考える上で手がかりとなるのが、ストラウドの次の言葉である。

日常的信念に対する潜在的脅威を取り除いたり武装解除したりするために、そうした脅威を述べるような見解が、矛盾していてとうてい真ではありえない、ということを示す必要は必ずしもない。・・・私の考えでは、そうしたステップは必要ないのであ

²¹ Cf. Stroud (1999b), xi.

²² Cf. Stroud (2004), pp. 441-2.

²³ Cf. Stroud (1999b), pp. 193-4.

て、それは過剰殺戮行為の一事例なのである²⁴。

われわれは、たとえば、「色のついた物が世界に存在する」という日常的信念をもっている。すると、そうした物は「本当は」存在しないとする「アンマスキングな形而上学的説明」は、明らかに、こうした信念に対する潜在的脅威となるであろう。しかしながら、こうした潜在的脅威を取り除くために、「アンマスキングな形而上学的説明」が矛盾しているとか偽であるとかということを証明する必要がないということは、われわれが前章の議論を通して明らかにしてきたことであった。すなわち、われわれはそうした説明を整合的な仕方を受容することが不可能であるということさえ証明されれば、「色のついた物が世界に存在する」というわれわれの日常的信念は完全に防衛されるのであった。しかし、そうであるならば、この上なおも、そうした説明が矛盾しているとか偽であるとかということを証明する（形而上学的な色の実在論を証明する）必要はないであろう。日常的信念に対する潜在的脅威を取り除くという当初の目的は果たされているのだから、この上さらに形而上学的な問題に決着をつけようとする（形而上学的な色の実在論を証明しようとする）のは過剰防衛なのである。

ここに見られるストラウドの考え方には、明らかに、「含意の不成立」を説明する際のストラウドには見られなかった論点が含まれている。「含意の不成立」を説明しているときには、みずからの超越論的論証からは「形而上学的な色の実在論」は帰結しないと言われていただけであったが、ここに見られるストラウドの考え方によれば、「形而上学的な色の実在論」は必ずしも証明される必要のないテーゼなのである。ここで見てとれるのは、形而上学的な結論を導き出すことをみずから抑制しようとするストラウドの姿である。では、なぜストラウドは、みずからの超越論的論証の帰結として、「色のついた物は世界に本当に存在する」という形而上学的な色の実在論を結論しようとししないのだろうか。

私の考える一つの可能性はこうである。これもまたストラウド自身が明示的に述べているわけではないが、どうやらストラウドは、形而上学の対立をある種のアンチノミー的狀況と見ているようである²⁵。それは、たとえば、形而上学的な色の「実在論」と「非実在論」という伝統的な対立であり、両者は正命題と反命題として、土俵の上でがっぷり四つに組み合っている。そして、ストラウドは、こうした正命題と反命題の五分と五分のぶつかり合いを見て、「肯定の答えを与えるためには、否定の答えを与えるために必要とされ前提されたこととまさに同じものが必要になるように思われる」と悲観的な感想を漏らしている²⁶。

すると、こうした不毛なアンチノミー的闘争に巻きこまれないようにするためには、いったいどうすればよいのだろうか。最も簡単な解決策は、そうした闘争に参加して勝利を収めようとするみずからの欲求を抑制することであろう。つまり、そもそも土俵に上がらなければ争いに巻きこまれることはない。形而上学という不毛の戦場には足を踏み入れないのがいちばんであり、そのために必要とされるのは、形而上学的探求に踏み込むことで

²⁴ Stroud (1999b), p. 203.

²⁵ 私がストラウドからこうした印象を受けるテキスト上の根拠としては、以下を参照。Cf. Stroud (1999b), pp. 192-3.

²⁶ Stroud (1999b), p. 192.

なんらかの形而上学的な結論を得たいというわれわれの「強烈な衝動」を押さえ込むことなのである²⁷。

もちろん、こうした考えを背後から支えているのは、われわれの日常的信念は形而上学的結論を得ることなしに十分に防衛可能であるという前章の議論である。色のついた物が存在するという日常的信念は、われわれの信念帰属の可能性条件を説明することのみによって、いかなる形而上学的結論にもコミットすることなく保証を与えることができるのである。すると、われわれは当初の目的をすでに達成したのであるから、ことさらに形而上学という不毛の戦場を踏み惑って「色の实在論」という戦果を追い求める必要はなくなる。しかしながら、形而上学的問題の答えを知りたい（たとえば、世界には「本当のところ」色のついた物が存在しているのかどうか知りたい）という「強烈な衝動」が、われわれの本性には根深く埋め込まれているので、そうした問題に関しては解決を求めないという「解決策」は、われわれに深刻な「不満足」をもたらすのである。われわれがなすべきことは、こうした衝動を抑制し統制することである。そして、それこそが、「不満足」を甘んじて受け入れるというストラウドの立場にほかならない。

以上が、「ストラウドの不満足」に対する私の理解である。私は、これがストラウドの立場を忠実に再現するものであるとは必ずしも考えていない。また、ストラウドの立場をこのように理解すれば、ブロークスが提出したような疑念に対しても十分に満足のいく応答が与えられるはずだ、とも必ずしも考えてはいない。本稿で私が示しておきたいのは次の一点だけである。それはすなわち、このように理解された「ストラウドの不満足」は、少なくとも一定の哲学的意義を有する興味深い見解であるだろう、ということである。

結語

ストラウドは、「不満足」を甘受することによって、形而上学的な問題に対して解決を与えようとする試みからみずから手を引いた——本稿を通して、私は、*The Quest for Reality*のストラウドがこのような像の下で理解される可能性を探ってきたが、このことは、ストラウドは形而上学的な「实在の探求」とそれを駆り立てる「強烈な衝動」それ自体を否定している、ということの意味してはいない。むしろ、ストラウド自身の考えはこれとは正反対である。ストラウドによれば、形而上学的な探求は（解決を求めるべき類のものではないが）あらゆる哲学的探求の根幹であり、また、そうした探求を駆動する「強烈な衝動」もまた（抑制され統制されるべきものではあるが）「人間本性のどこか深いところから生じている」のである²⁸。

しかし、ストラウドはかねてより、哲学的懐疑論もまた、われわれ人間にとっての本性的な問いであると主張していた。

前章で概要を示した懐疑的論法にはじめて出会ったとき、われわれはすぐにその論法を魅惑的なものと感じるであろう。その議論は何かわれわれの本性の深いところにあるものに訴えてくるし、人間というもののあり方についての本当の問題を提示するよ

²⁷ Stroud (1999b), p. 209.

²⁸ Stroud (1999b), xi.

うに見える²⁹。

また、懐疑論を決して退けられないものとみなすとすれば、それはいわば、認識論的な文脈における「不満足」の表明ということになるであろう。

意図されているとおりに[懐疑論者によって提出された]この問いを理解したならば、そのときの答えは、われわれを取り巻く世界についてわれわれは何も知りえない、というものにならざるをえないと私は思っている³⁰。

こうして、ストラウドにおいては、「人間にとって本性的な問題であると同時に、なんらかの不満足を甘受すべき（甘受せざるをえない）問題である」という点を軸にして、認識論の問題と形而上学の問題は繋がるのである。しかし、両者の連関について具体的に考察するためには、稿を改めなければならない。

(つちや・ようすけ 社会文化科学研究科博士後期課程)

²⁹ Stroud (1984b), p. 39.

³⁰ Stroud (1984b), p. 1.

文献

- Byrne, A. (2002) 'Yes, Virginia, Lemons are Yellow', *Philosophical Studies* 108, 213-222.
- Brewer, B. (2004) 'Stroud's Quest for Reality', *Philosophy and Phenomenological Research* 68, 408-414.
- Broackes, J. (2004) 'Realism, Scepticism and the Lament for an Archimedean Point: Stroud and the Quest for Reality', *Philosophy and Phenomenological Research* 68, 415-422.
- Fogelin, R. J. (2004) 'Stroud's Quest for Reality', *Philosophy and Phenomenological Research* 68, 401-407.
- Stroud, B. (1968) 'Transcendental Arguments', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 9-25.
- Stroud, B. (1977) 'Transcendental Arguments and 'Epistemological Naturalism'', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 71-82.
- Stroud, B. (1984a) 'The Allure of Idealism', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 83-98.
- Stroud, B. (1984b) *The Significance of Philosophical Scepticism*, Oxford University Press. [邦訳：『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか：哲学的懐疑論の意義』、永井均監訳、岩沢宏和・壁谷彰慶・清水将吾・土屋陽介訳、春秋社。]
- Stroud, B. (1989) 'Understanding Human Knowledge in General', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 99-121.
- Stroud, B. (1994) 'Kantian Argument, Conceptual Capacities, and Invulnerability', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 155-176.
- Stroud, B. (1999a) 'The Goal of Transcendental Arguments', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 203-223.
- Stroud, B. (1999b) *The Quest for Reality: Subjectivism and the Metaphysics of Colour*, Oxford University Press.
- Stroud, B. (1999c) 'The Synthetic A Priori in Strawson's Kantianism', in his *Understanding Human Knowledge*, Oxford University Press, 2000, 224-243.
- Stroud, B. (2004) 'Book Symposium: Responses to Adrian Moore, John McDowell, Robert Fogelin, Bill Brewer, Justin Broackes', *Philosophy and Phenomenological Research* 68, 423-442.
- 土屋陽介 (2003) 「超越論的論証と Invulnerability」、『哲学の探求』(第 30 号)、哲学若手研究者フォーラム、83-102。